

比べ読みと討論で読みを深める物語文指導

新潟市立新津第一小学校 教諭 山田 啓太郎 (平成 28 年度)

1 研究主題設定の理由

小学校学習指導要領国語編では、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」の育成を目指している。中央教育審議会答申において、「読書は、国語科で育成を目指す資質・能力をより高める重要な活動の一つである。」とされたことを踏まえ、各学年において、国語科の学習が読書活動に結び付くように〔知識及び技能〕に「読書」に関する指導事項を位置付けるとともに、「読むこと」の領域において、学校図書館などを利用し、複数の本などから情報を得て活用する言語活動事例が示されている。

これまでも、教科書の教材以外に、複数の本を教材として扱う手法が実践に採り入れられてきた。その中に「比べ読み」という指導方法がある。松本(1997)は、「比べ読み」を「複数の教材の内容を比較し、その相違に着目させることで、学習を深めさせる指導方法」と述べている。また、川上(2009)は、「比べ読み」について、「主教材と他の教材とを比較することにより、主教材が持つ構造や工夫に気付かせ、より深く読ませようとする物語文の指導方法」と定義している。以上より、本研究における「比べ読み」を「主教材と副教材とを比較し、主教材の読みを深める方法」と定義する。船津(2010)によれば、1988年から2008年の間に、『実践国語研究』(明治図書)、『教育科学国語教育』(明治図書)、『月間国語研究』(東京法令社)の三つの雑誌に掲載された文学作品の「比べ読み」実践を数えると55実践ある。船津(2010)は、「単元としては、宮沢賢治や椋鳩十、最近では、立松和平という作者に注目して比べ読みをする実践は多い。」と述べていて、自身も「海のいのち」と立松和平シリーズの「比べ読み」の実践を紹介している。私も「海のいのち」と『山のいのち』とを比べ読みさせたことがある。児童は、二つの作品の共通点や類似点を挙げることができた。

しかし、同一シリーズの比べ読みでは、主教材の構造、工夫、展開をより鮮明にとらえることができなかった。また、比べ読みでの話し合い活動においても共通点や類似点のみに着目させて話し合いをさせていたため、主教材オリジナルの構造、工夫、展開に気付けない姿があった。

そこで、私は、「比べ読み」の指導において、二つの手立てを行う。まず、比べる作品を、異なる作者で、かつ主教材と共通点や類似点のある作品にする。異なる作者の作品を比較させることで、同一作者や同一シリーズという先入観を無くし、あくまで作品同士を比べる意識付けができる。また、作品同士に共通点や類似点があることで、比較の際に条件が揃い、相違点が見えやすくなる。次に、作品同士を比べる討論を行わせる。文学作品の読みの学習に討論(ディベート)を用いることの有効性について井上(2001)は「ディベートではあやふやな立場は許されず、明確に違う二つの立場に立たなければならない。これは対比的な見方を作品の各部分で行うことを意味し、イメージ化を促進することになる。つまり、読みが鮮明になるのである。そして、対立論題によって二つの立場の選択を迫られ、ゆさぶりをかけられることによって、これまでにない新たなイメージの展開が促され、新たな読みの創造へとつながっていく。すなわち、ディベートの二面的論題は読みを二つに狭めるものではなく、二つの読みを『対比』し、『ゆさぶる』ことによってイメージ化を促進し、多様な読みを生み出すてだてとなるのである。」と述べている。作品同士を「比べ読み」する際に、討論をすることで、「対比」と「ゆさぶり」の作用が働き、読みの深まりにつながることを期待できる。討論の議題は「どちらの作品がより〇〇か。」とする。このように討論させることで、児童はそれぞれの作品の特徴を考えながら読んだり、友達の考えを聞いたり、友達と議論したりする中で、新たな発見をし、読みを深めることができると考える。

2 研究仮説

主教材と、作者が異なり、かつ共通点や類似点がある作品とを比べ読みさせ、それらの作品について相違点に着目させる討論を行わせることで、作品の構造、工夫、展開が明らかになり、作品の読みを深めることができる。

3 研究内容

まず、主教材について初発の感想を書かせる。次に、主教材に対し、作者が異なる、共通点や設定に類似点がある作品を比べ読みさせる。そして、主教材と比べ読みをした作品とについて相違点に着目させる討論をさせる。討論の議題は「どちらがより〇〇か。」とする。最後に振り返りをさせて、比べ読みと討論を通して、児童の読みがどのように深まったのか検証する。

4 検証方法

学力別に抽出児 A, B, C を設定し、抽出児の振り返りの記述から、比べ読みをした作品同士の相違点に着目し、作品の構造、展開、工夫などを根拠として、主教材について自分の考えを書くことができているか「考えの形成」を観点に考察し、仮説の有効性を検証する。

5 研究の実際

実践① 「海のいのち」と『ヤクーバとライオン』

主教材「海のいのち」と「生き物の命を奪うか、奪わないかで葛藤する」点で共通している副教材『ヤクーバとライオン』を比べ読みさせ、「(中心人物の)太一とヤクーバ、どちらの生き方がすごいか。」という議題で討論をさせた。

討論では、太一派は、父と与吉じいさの死を乗り越えて、村一番の漁師であり続ける太一の姿勢に着目する児童が多かったのに対し、ヤクーバ派は、自分の名誉よりもライオンの命を優先したヤクーバの精神力に着目する児童が多かった。

「海のいのち」 太一派の考え	「ヤクーバとライオン」 ヤクーバ派の考え
<ul style="list-style-type: none"> ・村一番の漁師にはなかなかできないのになれたことがすごい。 ・父が亡くなっても与吉じいさが亡くなくても村一番の漁師としてもぐりつづけたことがすごい。 ・漁師である父と与吉じいさを亡くしてもトラウマにならずに村一番の漁師であり続ける精神力がすごい。 ・父を破ったクエをとらなければ一人前の漁師になれないと自分は分かっていたのに、あえてとらなかったことがすごい。 ・クエの心情を自分で想像し理解しようとしていることがすごい。 ・父をクエに殺されて恨みがあると思うが、その恨みに負けない優しさがすごい。 ・誰も入らない瀬に行く勇気がすごい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ライオンと戦う勇気がすごい。 ・ライオンを殺さない優しさがすごい。 ・ライオンを殺せば立派な男になれたのに、ライオンを殺さずに気高い心をもった人間になったことがすごい。 ・村の人たちに期待されながらも自分の道を選んだことがすごい。

また、中心人物の行動の動機についての相違点について話し合われた。以下に話合いの一部を示す。

話合いの実際 一部抜粋	
C1	ヤクーバはライオンと絶対にやらないといけない行事じゃないですか。太一の場合は、自分が好きだからやっているってことを言いたいんじゃないかな。
C2	太一は自分のためっていうのもあるかもしれないけれど、どっちかっていうと、お父さんの仇をうつような感じのためにクエと戦おうとしたと思うんですけど、ヤクーバは自分が戦士になるためにライオンと戦おうと思ったので、その目的がちょっとちがうのかなと思いました。

話合いをもとに「太一は自らクエを追い求めているのに対し、ヤクーバは村のきまりの中でライオンと戦っていることから、やや受け身である。」という相違点が確認できた。

「海のいのち」 太一	『ヤクーバとライオン』 ヤクーバ
<ul style="list-style-type: none"> ・父の仇をとるため。 ・一人前の漁師になるため。 ・父を超えるため。 ・父に会うため。(クエは父のいた証だから。クエは父が転生した姿かもしれないから。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・与えられた使命のため。 ・戦士になるため。 ・勇気を示すため。

討論後、振り返りを書いた。抽出児の振り返りの記述(抜粋)をもとに考察をしていく。

児童 A (学力高)

初発の感想	振り返りの記述
<p>(父と与吉の死を)乗り越えてすごい漁師になったんだと思いました。</p> <p>(中略)お父さんのかたきかもしれないクエを見てもけっきょくクエを殺さなかったところも太一のお父さんに似ている様に思いました。</p> <p>おだやかでやさしいお父さんを見てきて、太一も漁師として育っていったんだと思います。</p>	<p>太一とヤクーバを比べてすごいと思うのは太一です。理由は、ヤクーバより太一の方が精神的な面で勝っていると思ったからです。(中略)ヤクーバはなんとなく伝統でやらなければいけない、けど太一の方は大切な父のかたきであるクエを見て、ヤクーバより殺意がありそうなのに、自分の意志でとめたからです。</p> <p>ヤクーバにも勇気があると思います。しかし村一番の漁師だったお父さんでさえもやぶれた瀬にもぐるのもとても勇気のいると思います。心にのこった人の考えはだれかが父をこえるためといった考えです。</p>

比べ読みと討論を通して、太一とヤクーバの行動の動機についての相違点に着目し、父の仇のためにクエをとろうとしていたことや、父の仇であったクエをとることを思いとどまった太一の精神力の強さに気付くことができた。また、『ヤクーバとライオン』のキーワードの「勇気」を観点に太一の行動について自分の考えを書くことができた。

児童 B (学力中)

初発の感想	振り返りの記述
<p>太一のお父さんが死んでしまった時に太一が毎日一本づりに行く…のところ。理由は、私だったらお父さんが死んでしまったらやる気がなくなるかなと思いました。</p>	<p>とうろんする前は、気づかなかったけどとうろんをした後あ～確かにと思ったことは、父のかたきをとるために漁師になる！という案を聞いた時私は気づかなかったのですごいと思いました。</p> <p>たしかに、ヤクーバとライオンの方も木がぼつんぼつん見えるだけなので、日かげになる所も少ないしなによりも水がない所でライオンと戦うのはすごいと思いました。しかし、太一の方が、村の一番はそう簡単にはできないと思うので太一の方がすごいと思いました。</p>

初発の感想では、太一が漁師を続ける理由について捉えることができていないが、討論の中で、中心人物の行動の動機についての相違点について話し合ったことで、太一が父の仇をとろうとしていたかもしれないと考えることができた。一方で、ヤクーバでは、舞台について、太一では、太一の人物像についてを観点に自分の考えを書いていて、比較をしようとしているが、観点がずれている。「どちらの生き方がすごいか。」という議題は、児童にとって抽象度が高くて難しく、考えを形成する際に、整合性がとれなくなったのではないかな。

児童 C (学力低)

初発の感想	振り返りの記述
<p>(疑問は) おとうはなぜ死んだかです。ぼくの頭の中では、1・クエに殺された説 2・自殺した説の2つが今頭の中にあります。</p>	<p>父のかたきをうつものにもそのクエを1年間さがすのはさすがくぼくもできないのですごいと思った。根拠はP226ページの1行目に太一がせにもぐり続けて ほぼ1年が過ぎたと書いているからです。</p> <p>ヤクーバではゆうきを 太一では命をもとにしている。</p>

討論の中で、中心人物の行動の動機についての相違点について話し合ったことで、太一が父の仇をとろうとしていたと考えるようになった。「ヤクーバではゆうきを 太一では命をもとにしている。」と比較をしようとしていることが見られるが、比較の観点が不明確である。

学級全体の結果を以下に示す。

振り返りの記述より評価する。
 A 評価：比べ読みをした作品同士の相違点に着目し、作品の構造、展開、工夫などを根拠として、主教材について自分の考えを書くことができています。
 B 評価：比べ読みをした作品同士の相違点に着目し、主教材について自分の考えを書くことができています。

出席人数 31 名中 A 評価 15 名 B 評価 14 名 → A 評価達成率 48.4%

以上より、作品同士の共通点である生き物の命を奪うか、奪わないかで葛藤する場面について話し合いが焦点化され、作品同士の相違点が明らかになった。その相違点をもとに、考えの形成をしている姿が見られたが、比較の観点が不明瞭な姿も見られた。児童の考えを整理するための手立てが必要である。また、討論の議題が、児童が考えを形成しやすいものになるような手立てが必要である。

実践② 『山のいのち』と「いかだ」

実践①からの改善点は2点ある。1点目は、児童の読みの変容が分かりやすいようにするために、観点を明確に初発の感想として書かせたことある。観点は、登場人物について、物語の内容について、表現についてとした。2点目は、児童が話し合いたい議題となるように、児童に議題を決めさせたことである。

主教材『山のいのち』と「夏の間、祖父や祖母の家にあずけられて、祖父や祖母から何かを学ぶ」点で類似している副教材「いかだ」を比べ読みさせた。討論は「どちらの方が生きていて実感できているか。」「どちらの方が思い出に残るか。」の二つの議題で行われた。本稿には話し合いがより深まった「どちらの方が思い出に残るか。」を議題とした討論について述べる。

討論では、いかだ派は楽しいひと夏の思い出であることに對し、山のいのち派は人生の中での貴重な体験になったという相違点が際立った。

「山のいのち」派の考え	「いかだ」派の考え
<ul style="list-style-type: none"> イタチを殺したことや祖父の活躍が思い出に残るから。 イタチを殺し、命の重さを学んだから。 命のつながりや大切さを祖父から学んだから。 人間の世界とは違う残酷さがあることが記憶に残りそうだから。 人生の中での思い出に残るから。 普段話さない静一が言葉を発したくらい心に残ったから。 	<ul style="list-style-type: none"> いかだが流れてきたことが思い出に残るから。 いかだに乗って動物と出会ったから。 「ぼくは楽しくてしょうがなかった。」と書いてあるくらい楽しい思い出になったから。 子ジカを助けたことが心に残っているから。 いかだの絵に子ジカを描いて印象に残ったから。

また、中心人物の学び方について話し合われた。以下に話し合いの一部を示す。

話し合いの実際 一部抜粋	
C1	いかだは生き物を助けることによってそういう大切さみたいなものを知るじゃないですか。でも山のいのちは殺すことによってそういういのちの大切さを学ばないかと思いました。
C2	いのちの大切さを学ばせたいのだったら、わざと殺したら、それはいのちをなくしているのと同じだから、いかだみたいに命を生かした方が大切さが分かると思います。

話し合いをもとに、『山のいのち』では、命を奪うことで命の大切さや命の循環を学んでいるのに対して、「いかだ」では、命を助けることで命の大切さを学んでいるという相違点が確認できた。

『山のいのち』 静一	「いかだ」 ニック
イタチを殺すこと、つまり命を奪うことで命の大切さや命の循環を学ぶ。	子ジカを助けること、つまり命を助けることで命の大切さを学ぶ。

児童に初発の感想と同様の観点で振り返りを書いた。観点は、登場人物について、物語の内容について、表現についてとした。児童に抽出見の記述（抜粋）をもとに考察をしていく。

児童 A (学力高)

初発の感想	振り返りの記述
おじいちゃんについて(中略)少し残酷なところもあったけど、何となく自然のこわさや大切さをしっかり理解していると思いました。イタチを殺してしまったけどそれを静一の経験としてやってる気がしました。	山の命は生き物を犠牲にして命の大切さを教えてくれる感じがしたことです。最初はみんなの「生き物を犠牲にして命の大切さを教えてくれている。」と言う考えに、命奪っちゃってるから命は大事にしてないんじゃないか？と思っていたのですが、よく考えてみるとその命を犠牲にし、それでかわいそうだな、とか悲しいな、とかの気持ちを出してこれはやっちゃんやダメなことなんだなと思わせて命の大切さをわからせてるんじゃないかなと思いました。

比べ読みと討論を通して、中心人物の学び方の相違点から、祖父がイタチを殺した意味について自分の考えをより詳しく記述できた。

児童 B (学力中)

初発の感想	振り返りの記述
祖父は、すぐに静一が来たらやさしく受け入れた。山のこともとてんもわしかった。今回の登場人物ではそこまでハッピー？みたいなことは書かれていない。(中略)あらためて命の大切さを知りました。	静一はおじいちゃんにいろんなことを教えてもらい、悪いことをしたイタチをころすことでより命の大切さを知る。いかだは、子ジカがどろの中にはまってしまい動けなかった所をニックは助けた。これもまた命の大切さを知った。確かにどっちも命の大切さを知ったと思うけど山の命の実さいにころして命の大切さを知る方がより深くなると思った。

比べ読みと討論を通して、中心人物の学び方の相違点から、『山のいのち』の祖父が伝える「命の大切さ」に

についての自分の考えを深め、祖父の行動の理由を書くことができた。また、「いかだ」との比較の際にも、討論で話が深まった「中心人物の学び方」という観点をもつことができている。

児童C (学力低)

初発の感想	振り返りの記述
<p>ぼくは、山の命を読んで思ったことはせいいち君はそんなにしゃべらない子だな～と思いました。</p> <p>イタチを殺してしまうすこしショックな内容でした。あと血が岩と水をそめたとかいているのですこしグロイかんじもしました。</p>	<p>1つ目は、おじいさんです。ぼくは最初イタチを殺すやばい人かと思ったらおじいさんはせいいちになにか教えたことが分かりました。</p> <p>2つ目は殺されたイタチを見たせいいちです。死んだイタチを見たせいいちはそのなにおどろいてないと思ったら、名前どうりしずかなせいいちがこえをだすらいおどろいたとはすこくびっくりしたんだろうなと思いました。</p>

はじめイタチを殺すことをショックな出来事としてとらえていたが、振り返りでは、祖父が静一に何かを教えていると読みが変化した。また、静一の行動について、討論の中で出てきた友達の考えをもとに静一がとても驚いていたことについて振り返りに記述をした。しかし、児童Cの記述には、作品同士の相違点についての記述は見られなかった。相違点に着目できなかった理由は、振り返りのさせ方に問題があったと考える。今回の振り返りでは、「登場人物、内容、表現」の観点を示し、比べ読みと討論を通して気付いたことを書かせが、児童によっては、比べ読みと討論を通しての学びの自覚が難しかったのではないかと。

学級全体の評価は以下の通りである。

<p>振り返りの記述より評価する。</p> <p>A 評価：比べ読みをした作品同士の相違点に着目し、作品の構造、展開、工夫などを根拠として、主教材について自分の考えを書くことができている。</p> <p>B 評価：比べ読みをした作品同士の相違点に着目し、主教材について自分の考えを書くことができている。</p> <p>出席人数 25名中 A 評価 9名 B 評価 17名 → A 評価達成率 36%</p>

以上より、討論の中で、作品同士の相違点が明らかになり、その相違点をもとに、考えの形成をしている姿が見られることが分かり、実践1と合わせて、作品同士の相違点が読みの深まりにつながるということが分かった。一方で、実践②の児童の振り返りでは、学級全体のA評価の達成率が、実践①に比べて12.4%下がった。下がった原因は、児童の比べ読み討論への目的意識が十分ではなかったことや、振り返りの観点が児童の学びが反映されにくいものだったことなどが考えられる。

6 成果と課題

成果

○異なる作者で、かつ主教材と共通点や類似点のある作品を用いて比べ読みをさせることで、作品同士の類似点や共通点の部分について活発に討論が行われ、それぞれの作品の相違点が際立ち、児童の読みが深まること。

課題

- より多くの児童が作品同士の相違点に着目し読みを深めることができるようにするために、作品同士の相違点に着目し読みを深めるための単元のデザインにすること。
 - 特に、学習のスタートである比べ読みと討論を行う目的意識の持たせ方とゴールである振り返りの書かせ方についての検討が必要である。
- 表現の効果について考える児童が少なかったこと。
 - 表現に着目させるために、比べ読みさせる教材の選定や、振り返りの観点の設定のさせ方などを工夫していく必要がある。

〈引用・参考文献〉

- ・文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』
- ・松本 修(1997)『『比べ読み』『重ね読み』の授業, Groupe Bricolage 紀要 15 2-6』
- ・川上 弘宜(2009)『『比べ読み・重ね読み』で『読解表現力』を付ける』教育科学国語教育 2009年6月号 p52 明治図書
- ・船津 啓治(2010)『比べ読みの可能性とその方法』p201, pp 204-207 溪水社
- ・井上 雅彦(2001)『ディベートを用いて文学を〈読む〉—伝え合いとしてのディベート学習活動—』pp35-36 明治図書

〈副教材〉

- ・ディエリ・デデュー作・柳田 邦男訳(2008)『ヤクーバとライオン 1 勇気』講談社
- ・立松 和平、伊勢 英子(1990)『山のいのち』ポプラ社